

## 【論文】

# 農事暦をテーマとした昔話について

山崎 英二\*

## An Analysis on Fairly Tale Whose Theme is Concerned with

## Agricultural Mama

YAMAZAKI Eiji

伝承絵本の基となる昔話の再話について考察する。まず子どもに昔話を届ける意義を明らかにする。次に自然と調和し食料を生産するつましい庶民生活を背景にもつ昔話の性質に鑑み、農事暦と昔話の関わりを問題とする。各地域の自然の様相の変化を農作業の目安として自然の恩恵への感謝をこめて作られた農事暦の意義を検討する。農事暦の事例として雪形を挙げ、雪形の持つ価値を小学生に伝えた事例を報告する。そして雪形をテーマとした福島県中通り地区に伝承されている昔話「種まき兔」を問題とする。また寒の季節に入る1月6日頃から9日目「寒九」の時期の雨と農作物との関係を描いた昔話「寒九の雨」の存在を知り得た、中通りの近隣地区、会津における聞き取り調査の結果報告を行ない、「寒九の雨」に関しても考察を加えた。総合考察として、昔話には自然の恵みを慈しんで暮らしてきた先人の、生活の安定と向上に対する願いが込められていること、また彼らが生業としてきた農業において季節の推移を読み取る農事暦をテーマとする昔話を散見できること、それらは自然と歩調を合わせた暮らしに触れる機会を提供してくれることを明らかにした。そして都市化された環境で暮らし先進のIT機器に慣れた子どもたちが、このような昔話に接して健全な季節感や時間感覚を取り戻すことの意義を明らかにした。

キーワード：伝承絵本、農事暦、雪形、種まき兔、寒九の雨

### I. はじめに

絵本は、創作絵本、科学絵本、伝承絵本に大別されることが多い。筆者は越谷保育専門学校紀要第2号において、加古里子により創作された絵本を問題し考察を加えた。また第3号においては、子どもに「なんだろう」「なぜだろう」という興味・関心を持たせ「そうなのか」という気づきを提供する科学絵本、特に福音館書店による月刊絵本『ちいさなかがくのとも』を研究の対象とし、同誌の「物語性」と、着眼点を読み手に伝える工夫を問題として考察を加えた。そこで本稿では、前述した絵本の分類における伝承絵本に考察を加えるという問題意識から、

伝承絵本を制作する際の基となる昔話の再話に焦点を当てる。

大人が物語を語り子どもがそれに耳を傾ける営みは、人間が家庭や社会を形成するなかで長く行われてきたものであり、大人、子ども両者にとっての根源的な喜びを生み出す活動であるといえる。保育者が園で絵本を読み聞かせる活動の原点は、まさにこの大人による昔話の語り聞かせであることは言うまでもない。また子どもの健やかな成長に寄与するものとして、公民館や園などで子どもに昔話を語る機会が多くの語り部によってもたらされている。昔話の研究者で、自ら昔ばなし研究所を主宰する小澤

\*越谷保育専門学校非常勤講師

(2007, p221)は「子どもは話を聞くことに大きな喜びを感じている。子どもは生の声で話を聞かせると、吸い込まれるように聞いてくれる。」と指摘している。小澤の指摘を待つまでもなく、先人の知恵が結集され幾多の人々の間で語り伝えられて来た昔話には、子どもが夢中になるものがあることに疑う余地はないだろう。

説話文学が公家や武家の読み物であるのに対し、昔話は地域に暮らす一般庶民が長い時間をかけ練り上げて伝えてきた民俗文化である。彼らの多くが農業に従事していたことは、昔話の登場人物、たとえば「お爺さん」が田や畑を耕す場面がごく自然に語られていることから明らかである。昔話の一つひとつを読み返してみると、物語の核心に迫る出来事背景に、自然と調和しながら食料を生産するつましい庶民生活を垣間見ることができる。

農業を生業としてきた我が国の先人たちは、定住性、土着性をもって暮らし、多彩な自然と風土、そして多くの自然災害とも向き合い暮らしてきた。その中で自然の様相の変化、季節感、季節の変わり目に敏感になったのだろう。たとえば立春から数え 88 回目の夜 (5 月 1 日頃) が種蒔きの時期の目安となり、また立春から 210 日頃 (9 月 1 日頃) によく台風が来るから気をつけるなど、季節の境目を判断する知恵を手にしていった。このような農事暦は、第一義的には食料生産のためのテクニックであったのだろうが、先人たちの手によって次第に熟成し、昔話と同じように民俗文化の一つとなったとみてさしつかえないだろう。

本研究は、農事暦と昔話の関わりを問題とする。つまり自然からの恵みを慈しみながら暮らして来た先人たちが、生活の安定と向上に対する願いを込め、彼らが各地域の自然の様相の変化に接し、それらを農作業の目安として自然の恩恵への感謝をこめて農事暦をつくり、その暦をテーマとして伝えらえた昔話に着目する。

## II. 農事暦としての雪形

雪形は、新たな自然景観としての観光資源として解釈され、科学的な教材や写真撮影のモチーフとしても注目されている。しかし元来は、山の斜面の残雪パターンに季節の推移を読み取り農業に生かす知恵として幾多の先人の手によって語り伝えられてきた農事暦である。気温や水温に大きく左右される田植えの季節を示す気候景観であり、長野県の白馬岳の代掻き馬の雪形はよく知られ、既に先行研究によって雪形を目安にして農耕が行なわれて来たことが明らかにされている。荒山(1991, pp.1-15)の、信州地方では雪形が苗代作り、田起し、田植え、畑作物の播種などの農作業の開始の時期を知らせていたという報告、脇田(2011, pp.9-23)の、飛騨の山あいの山々を源流とする高原川沿いの集落で語り伝えられている農事暦としての雪形の分析、大越(pp.187-200)の、雪形を生活暦、自然暦などとより大局的に捉え、雪形を通して我々がいかに自然と共生していくべきかの知恵を探る研究などが挙げられる。

毎年同じ時期に現れては消える雪形は、土地と期間が限定された景観である。そして山肌で織りなされる自然現象を、平地から眺める人々の想像力によって成り立つという点に特徴がある。平地から眺める雪形を身近な動物や生活用具に例えるという、農業を生業とする一般庶民の想像力が成り立たせているのである。

## III. 農事暦の価値を子どもに伝える試み

雪形の持つ価値を子どもに伝えようとする試みが、小山(pp.76-78)によって報告されている。小学校の社会科の授業の教材として雪形を使用するもので、食料を生産する営みが先人の知恵で支えられてきたことを子どもに伝えることを目標とし、雪形と農業の関わりに重点を置いた授業実践である。特に現在も米作りに雪形を活用している長野県白馬村の米づくり農家の自然との深いつながりが強調されている。ある地域で培われた農家の経験が農事暦となっていく過

程が子どもに伝えられることになる。

小川の実践は雪形を単なる現象として扱うのではなく、食料生産と雪形を関連づけて学ぶ機会を設定し、自然環境を通して自然と人との関係に気づく機会を学校教育において提供するものである。農事暦をテーマとする昔話を問題とする本研究は、子どもに自然と共生することの意義を伝えるという点で小川の研究と共通点があるが、小川においては農事暦を伝える手段が社会科の授業であるのに対し、本研究では昔話そのものであるという相違点がある。

雪形という農事暦をテーマとした昔話「種まき兎」が、福島県の中通り地区で伝承されており、これまで福島県に所縁のある研究者を中心とした学術研究によって取り上げられている。本研究においてはまずこの「種まき兎」についての先行研究を検討し、昔話「種まき兎」に考察を加える。またこれにヒントを得た筆者は、2015年9月に会津坂下町語り部の会の皆さんに聞き取り調査を行ない、「寒九の雨」という農事暦をテーマにした会津地方に伝わる昔話についての知見をいただいた。「寒九の雨」に関して考察を加え、農事暦がテーマとなった昔話「種まき兎」と「寒九の雨」が持つ文化的経緯を明らかにする。

#### IV. 研究の方法と目的

稲田(2010, pp.48-49)は、昔話研究の方法を次のように分類している

- ① 昔話の起源と変容の研究(物語の歴史的・文化的な背景、時代の推移による変容)
- ② 古典文学との比較(説話、歌謡、語り物など、隣接するジャンルの古典との関係性)
- ③ 昔話に内在する意味の解釈(登場人物や話の展開に内在する意味)
- ④ 昔話の形態や構造の分析(登場者やストーリー展開の型の形態上・構造上の

特色)

- ⑤ 語り口の分析(テンポ・間の取り方・抑揚・アクセントなど音声上の特徴)
- ⑥ 伝承論(語り手の個人的な資質に関する研究)
- ⑦ 昔話の機能(語られる目的、昔話の伝承が社会や個人に対し果たす役割・機能)
- ⑧ 再話や翻訳に関する研究(昔話として定着するまでの経緯)
- ⑨ 再創造に関する研究(昔話を再創造した作品と原話との比較)
- ⑩ 昔話の伝承に関する実践研究(昔話伝承における手段や媒介について)

本研究を上記の稲田の分類に当てはめると、⑦昔話の機能(語られる目的、昔話の伝承が社会や個人に対し果たす役割・機能)ということになる。つまり農業を営む人々の生活の知恵から生まれた農事暦をテーマとした昔話が果たす役割を明確にするものである。さらに子どもが囲炉裏端や布団の中で大人から聞かされてきた農事暦を扱った昔話を、現代に伝承することの意義を明らかにする。昔話といえどかく登場人物の活躍や奇想天外な話の展開が注目されがらだが、本研究ではあえて昔話で描かれている農事暦と登場人物との関わりに着目する。

本研究の目的は、農事暦をテーマとした昔話を考察し、自然の変化を生活に生かす知恵が昔話を通して伝えられた役割とそれを現代に伝える意義を明らかにし、考察を加え、昔話の価値を見直す一助となることである。

#### V. 雪形と中通り地区の「種まき兎」について

##### 5-1. 福島県の吾妻小富士と雪形について

—先行研究から—

福島県の中通り地区から吾妻小富士(標高1704メートル)の山肌に、春先の4~5月頃に

残る雪形を眺めることができる。吾妻小富士の雪形は鑑賞の対象としてその価値が評価される現状がある。たとえば作田・赤坂(2007, pp.312-319)は造園学者の立場から、吾妻小富士の雪形の価値を見直し、雪形が季節の変化、季節の訪れを楽しむための機会(時間)と場所(空間)をいかに提供できるのかを論じている。しかし吾妻小富士の雪形は紛れもなく農事暦として利用されてきたことが、他の先行研究により明らかになっている。梅宮(1988, p13)は福島民報において、およそ260年前の江戸元文期に岡村良通が著した『寓意草』で吾妻小富士の兎の雪形が紹介されていることを指摘している。また「吾妻小富士に兎が出たら種をまけ」という趣旨のことわざが、福島市教育委員会による口承伝承の調査報告書に所収されている(福島市教育委員会 1970, p114)。これらからこの地域の人々が吾妻小富士の雪形を農事暦として活用し始めたのは、かなり前のことであると考えることができる。

## 5-2. 昔話「種まき兎」について

福島県中通り地区に伝承されている昔話「種まき兎」が採集され記録されたのは、1936年(昭和11年)である。そのあらすじは「田畑を耕して暮らしていたみなし子が兎を拾ってかわいがっていた。日照りが続き、村人が雨乞いをする中、一羽のトンビがその兎を掴んで飛んで行くと、吾妻小富士の斜面にウサギの雪形が現れ、やがて水が湧き川が流れ村が豊作となった。それ以来、吾妻山の雪形を「種まき兎」と呼ぶようになり、種まきや蚕の掃立の目安となり村が栄えた」というものだ。1936年に採集され記録されたこの話がいつごろ、誰の手によって語り始められたのかは定かではない。しかし前述したように260年前の寓意集に「種まき兎」の雪形の記録があることからかなり前のことであると考えることができる。その自然の恵みへの感謝の念を物語にして、しかも文盲の老婦も幼児も理解できる平易な表現にして、口から口へ

と伝承されて採集され、1936年当時に至っているということができるだろう。

### 「種まき兎」(吾妻小富士のウサギガタ)の原話

むかし、田沢村の兎田(地名)にみなし子がいた。山の奥さ小さな田畑をつくってくらしていた。ある日、山で親子の兎をひろってかわいがっていた。そのころ、このあたりは日照りが続いて田植えができない、ひどい不作の年だった。村人は田沢の貝の沼は、西山の雷沼の底とつながっていて、吾妻権現がまつられていたので、ここで雨乞いをしたが、さっぱりきまめがなかった。そこで村人は山伏の先達で、大勢雨笠みの着て吾妻山さ登って雷沼に

「雨たんもれ 龍王 やーい。」

と言ったが、一粒の雨もふらんかった。みなしごも裏山さ登って拝んでいると、二羽のトンビが天高く飛んでいた。

「トンビ びいひよろろ 目まわしてみろ」

と言うと、トンビは急に谷へ下りて行って、白いものをわしづかみに かつさらって 西山の方さ飛んでいってしまった。飛んでいった先をみると、たまげた。吾妻小富士の横はらからは、親子ウサギの雪形がありありと現れていた。トンビにさらわれた親子ウサギは、実は山神になっていたんだ。

そこで小富士の神に

「雨たんもれ 龍王やーい」

と拝んで山をおりてみるとびっくりした。家の前の岩室から水がこんこんと湧いて、川さ流れていた。

「これはありがたい」

と田んぼに水をひき、種をまいた。村人にも教えたら、秋になて村中豊作万作になって、みんな福しくなつて、その子は大きくなると長者様にあつた。それからその田を「兎田」と吾妻山の雪形を「種まき兎」と呼ぶようになり、以来、種まき、蚕の掃立の目安となつて、村は栄えもうした。

話者：渡利小倉寺・加藤白山

採集者 渡利中山・長沢幸四郎

校訂者 鎌田丸子・香内佐一郎

(梅宮茂 1999 『種まき兔』の誕生『すぎのめ』第22号 pp.5-9より)

### 5-3. 考察

「種まき兔」の昔話は、春になり山肌に雪形が現れるという季節の流れがテーマになっている。子どもに季節感を伝えるとともに、雪形という自然現象と食料生産とを関連づけて学ぶ機会を与えている。登場人物のみなしごが兔を拾ってかわいがるといふ動物への思いやりと優しい心情と、兔が育ててもらったお礼として山神となり水を村人に提供するという報恩の精神、また村人が残雪の模様を兔と読み取ることから聞き手である子どもの想像力を育むことが期待できるという3つの要素を含むことから、この昔話を現代の子どもたちに伝える意義があるといえるだろう。

## VI. 会津地区の「寒九の雨」について

### 6-1. 会津地区における聞き取り調査

筆者は「種まき兔」が伝承されている福島県中通り地区の近隣、会津地区で聞き取り調査を行なうこととし、平成27年9月10日に会津市の会津坂下町中央公民館において、「会津坂下町語り部の会」の皆さんにインタビュー調査を行った。

まず、会津地区においても「雪形」が農事暦として語り伝えられているのかという趣旨の質問をした。これに対し、会津では飯豊山を「御山」と呼び季節を問わず「御山がよくみえんなし」とよく挨拶をする。そして春先に飯豊山に雪形をみる農事暦がる。岩山の真下に「寝牛」が現れると、会津山都町では「農作業の始まり」といい、会津坂下町では「田起こしの目安」とされてきた。東を向いた牛は角や尾もあり立派な姿だが足がない。「春が早くてまだ牛が寝てい

る」という地元住民の優しい気持ちから「寝牛」と呼ばれている。また一方で磐梯山の山肌に見える雪形は、晩冬から春になるにつれて雪形が次第に細くなっていく。その様子をたとえて、始めが虚無僧、次にイカ、最後に中心部だけ雪が残り、その姿をへびにたとえ農事暦として使われてきた、というものであった。前述したいくつかの先行研究で信州や飛騨地方など多くの地域の雪形が報告されているが、地元で語り継がれてきた雪形についてのお話しを生の声で直接聞くことができ貴重な機会となった。

### 6-2. 昔話「寒九の雨」について

次に会津地区には「種まき兔」のような農事暦をテーマにした昔話が伝承されていないかを尋ねた。「雪形」をテーマとした昔話は伝承されていないが、「寒九の雨」という昔話がある。寒の季節に入る1月6日頃から9日目を「寒九」というが、その頃降る雨を「寒九の雨」と呼んでいる。その頃に雨が降ると豊作だという農事暦が会津地方に伝わっている。そしてこの時伺ったあらすじは次の通りである。「寒九の雨を待ち望む両親の様子を見た息子が、雷神のいる天に赴き、寒九の時期に雨を降らせるよう懇願する。雷神はならば自分で天から雨を降らせに行けという。息子は雨袋をかつぎ『会津はこのあたりかな』とまさに雨を降らせようとした時、夢から覚めおねしょをしてしまう」というものであった。原話は次のとおりである。

### 昔話「寒九の雨」の原話

「今年は、雨ふつといいなあ。去年、降んねがったら、凶作だった。今年はなんでかんで、寒九の雨、降ってもらいでなあ」とつつあまど、かさまがなあ、寒九の雨、待っていだど。それ聞いてだ男子(おどっこ)、

「ああ、まだ凶作なつとど、芋飯(いもまんま)ばっかくれられんのがなあ。はあて、大変だなあ。お金も貰わんにくて、まだおどつとど、

おがやが貧乏すんなねのがなあ」

ど思っとな、

「そうだ、天さ行って雷様に頼んでこんべえ」  
つって、雷様さ頼みに行っだど。

「雷様、雷様・あのう、寒九の雨降んねど、おどつつあど、おがや、まだ凶作になるって心配（すんぺしん）してっから、どうが寒九の雨降らせでくなんしょ」

そしたらな、

「あのなあ、にしゃそうづうけんじよ、この寒（かん）の寒い時（どき）、おら家の子めら皆なあ、こたつ（炬燵）つつぶぐってで、だあれも雨降らせき、行きだぐねえつだ。とごろで、そんなにしんぺ（心配）すんだら、にしゃ行って来い。雨袋やっから。どごいらさでも行って雨まいでこう（来う）」

って、そうゆっだど。ああ、息子喜んで雨袋かづいで行っだど。

「このあたりがおらあたりの田んぼがなあ」ど思っとな、雨袋どどおーと開げだ瞬間だど。目が覚めつつまってなあ、ねしょんべんむぐしてだつうはなし。

「このかん（寒）の寒いに、ねしょんべんむぐして、乾がねぐって、しょうがねえ」

って、かえって怒らっちゃだど。

そうだけんじよも、百姓の子めらっちゃなあ、親だづ（達）がしんぺ（心配）すてるように、子めらも豊作になつと良いなあど思っとなんだな。

語り 山田登志美

記録 品作悦子

（NPO 語りと方言の会編 2007 『塩川の伝承 山田登志美の語り』 pp.281-282 より）

### 6-3. 考察

会津地方において「雪形」をテーマにした昔話を探し出すことはできなかったが、「寒九の雨」という農事暦をテーマにした昔話を蒐集することができた。我が国には元々「寒の雨」と

いう寒中に降る冷たい雨を意味する俳句における冬の季語がある。「寒九の雨」という農事暦は、「寒の雨」という自然現象と向き合い調和しようとした先人の真摯な姿勢から生まれたものである。そして昔話「種まき兔」と同様に、「寒九の雨」も自然現象と食料生産との関わりを学ぶ機会を聞き手である子どもに与えている。また子どもが雷神のもとに雨を降らせて欲しいと懇願に行く場面では、家族を思いやる気持ちを聞き手である子どもが感じ取ることだろう。そして大人と子どもが一緒になって不作を心配し、収穫の喜びを共にする姿も聞き手に家族愛のあたたかさを感じさせる。昔話「寒九の雨」は、子どもに自然と調和しながら食料を生産しなければならないという農業の原則を伝える役割を果たしているといえる。また子どもが親とともに農作を願ったけなげさは、現代の子どもの胸をうつ昔話であるといえるのではないだろうか。

## VII. 総合考察

筆者が会津地区で聞き取り調査を行ったのは、「種まき兔」が伝承されている福島県の中通り地区の近隣である会津地区は、農業に対して似通った心情があり、伝承されている農事暦や昔話にもそれが反映されているのではないかという発想からである。なぜなら農事暦は、一般庶民が日々の生活のなかで結実させたものであるからである。今回問題とした「種まき兔」と「寒九の雨」には、寒冷の気候の自然と調和しながら食料を生産するつましい一般庶民の豊作を願う心情が込められていることが明らかになった。

我々日本人は、雪形だけでなく、花見、セミ、鈴虫の鳴き声、月見や紅葉狩りなど、先人が育んだ季節感を伝えてきた。しかし都市化する環境で暮らす子どもは、このような季節変化、季節の訪れを体験する機会を持ってなくなってきている。たとえば季節の変化や訪れをテーマとした絵本を選定し家庭や園で読み聞かせることでそのような機会を補うことも大切な活動だろう。一方で日本の各地に語り継がれている子ども文

化財の中で、季節の変化や訪れをテーマとした昔話を掘り起こしそれらを子どもに語り聞かせるのも、意義のある活動であると考えられる。そして特に先人が自然と向き合い調和を図りながら生業としてきた農業において季節の推移を読み取る農事暦をテーマとした昔話に接することは、自然と歩調を合わせた暮らし方に間接的ではあるが触れる機会となるはずである。そして都市化された環境で暮らし、先進のIT機器に慣れた子どもたちが、このような昔話に接して健全な季節感や時間感覚を取り戻すことを期待する。

#### VIII. 今後の課題

現在全国に広く流布している昔話集、たとえば『日本の民話』(1979)、『日本昔話大成』(1980)、『新編 日本の民話』(1985)、『日本昔話通観』(1985)、『民話昔話集作品総覧』(2004)、などに、今回問題とした「種まき兎」と「寒九の雨」は蒐集されていない。地域に埋もれている昔話を紹介する機会となったことを期待する。今後も全国各地の脚光を浴びていない昔話を蒐集していきたい。

本研究は、聞き取り調査で蒐集した昔話そのものと、その背景に関する考察にとどまっており、今後、昔話と地域の庶民との関わりをより深く掘り下げる必要があると考えている。また今回の二つの昔話の舞台となった福島県以外の地域においても、幾多の人々の間で語り伝えられてきた農事暦や自然暦をテーマとした昔話を蒐集し、自然と調和を図りながら生きてきた先人の知恵を見直す必要があると考えている。

#### 謝辞

本研究においては、会津坂下町中央公民館の皆様、会津坂下町語り部の会の皆様にご協力をいただきました。ここに感謝申し上げます。

#### 参考・引用文献

- 荒山正彦 1991 「農事暦としての雪形」『待兼山論集』  
大阪大学文学部
- 福島市教育委員会編 1970 『民俗資料口頭伝承 福島市の文化財 福島市文化財調査報告書第8集』
- 稲田浩二・稲田和子編 2010 『日本昔話ハンドブック』三省堂
- 稲田浩二・小澤俊夫編 1985 『日本昔話通観』同朋社出版
- 片平幸三郎編 1985 『新編 日本の民話』未来社
- 日本アソシエート編 『民話昔話集作品総覧』2004 紀伊国屋出版
- NPO 語りと方言の会編 2007 『塩川の伝承 山田登志美の語り』語りと方言の会
- 小山茂喜 2010 「伝統・文化に関する教育の充実に関する実践 ―雪形を扱った事例」『教職研究』第3号 信州大学教職教育部
- 大越公平 2002 「雪形伝承にみる自然観」『生活文化研究』第9号 関東学院女子短期大学生活文化研究所
- 小澤俊夫 2007 「これからの課題―昔話内部の研究を―」『口承文芸研究』第30号
- 作田哲啓、赤坂信 2007 「吾妻小富士の雪形―地域限定・期間限定の自然風景―に関する一考察」『ランドスケープ研究』第70巻 第4号
- 関敬吾・野村純一・大島廣志編 1980 『日本昔話大成』角川書店
- 梅宮茂 1999 「『種まき兎』の誕生」『すぎのめ』第22号
- 武田正編 1979 『日本の民話』(株)ぎょうせい
- 梅宮茂 1988 「吾妻山の種まき兎考」『福島民報』5月16日13面
- 脇田雅彦 2011 「飛騨の雪形―農事暦に饗宴―」『民具マンスリー』神奈川大学日本常民文化研究所